



夏・南の島で暮らす猫

「気持ち悪い」

「あいつ、まだ来てるの？」

「うざい」

「なんかムカつく」

「ホント暗いよな」

「早くどっか行けよ」

はつと目が覚めた。寝惚ねぼけた虫の音と風に揺られる木々の音が外から聞こえてくる。まだ部屋も外も不気味なぐらい真つ暗であった。真夏の島の夜は、寝苦しい程に暑い――。じつとりと背中が汗でびしょびしょになっている。夢で良かったと直海なちみは思う。もう現実で同じような事は聞きたくないのに、まだ夢の中にまで少し前まで言われていた事が出てくる。

——もう学校には行きたくない。

クラスが替わつて数ヶ月の事であつた。周りの女子も男子も直海を無視し始め、直海に聞こえるように悪口を言うようになった。最初は親の言うとおり気にしないようにしていた直海も、それが一週間、二週間と続くようになり、段々と学校に行くのが苦痛になつてきた。

行きたくない——そう思っている間にいつしか朝の起床時間に起きられなくなり、学校に行く時間になつても着替えもしないまま自室に閉じこもるようになった。時折、学校に行けた時があつても、家に帰つて来た時には自室に籠もつて泣く日が続いた。結局、一学期が過ぎ、学校に行けないまま夏休みを迎えた。

娘を心配した直海の両親は、不登校児を対象とした南の島の里親制度を聞きつけ、せめて休みの間だけでも自然の中でゆつくりと直海を回復させようと島に送り出した。

最初は恐々と周囲に接していた直海も、周りの大人達の優しさに触れて、一週間も経つと一人を外に出て島を探検するようになった。

——しかし、都会での事もあつてか、同年代の子供達とはまだ仲良くなれたという訳ではなかつた。直海は島の子供達を避けて一人、いつも浜辺で泳いでいた。同じ浜の別の場所では楽しそ

うに遊ぶ子供達——。その中に混じりたいという気持ちもあるが、また同じ事を経験したくなく
て行けない——。

いいんだ、私は私で。

そんな思いを振り払うかのように、波の穏やかな島の外れのビーチで、直海は一人、今日も浅瀬を泳いでいた。子供の腰程度の深さがずっと続いているので、深みに嵌^{はま}って溺れる心配も無いだろうし、時折、島の人間がビーチを通って声をかけるので、一人でも問題は無い。持ってきたゴーグルを嵌^はめて海に潜ると、目の前に広がる真っ青な水の世界——。

海の世界は見ていて飽きない。南の海ならではの原色鮮やかな熱帯魚達はまるで直海を歓迎するかのように近くに寄って泳ぐ。大昔の珊瑚^{さんご}の死骸が積もってできた白砂の海底からひよこつと出ては隠れる蟹や蛸などの軟体生物——。

そして、魚達に休息の場を提供するサンゴ礁——。海はまるで、未知の世界を探検するような楽しさがある。夕方、里親のおばさんが呼びに来るまで直海は一日の大半をここで過ごしている。海は直海を優しく包む——。直海にとってはかけがえの無い至福の時間であった。

今日はまだおぼさんのお迎えが来ていない。周りの子供達は疲れてしまったのか、いつの間にか海から上がってどこかに行ってしまったようだ。直海もしばらくは海に潜っていたが、やがて疲れてきたので海から上がり、砂浜に生えているガジュマルの木の陰で休む事にした。木陰はじりじりと焼き付けるような真夏の太陽から逃げる為の休息所としては最適の場所だ。近くの藪くさぶには真つ赤な野生のハイビスカスが咲いていて、青空に向かって我先にと天を仰ぎ見ている。その赤と青のコントラストを眺めながらガジュマルの木の下で一息ついていると、さつきまで泳いでいたグループの一人の男子が浜に戻って来た。しばらく辺りを見回していたが、休んでいる直海を見つけると、真つ直ぐにガジュマルの木に近付いて来た。木の近くまで来ると、黙って見ている直海に向かってこう言った。

「一緒に帰らない？」

亮太りょうたという名前だったと思う。唐突に亮太に言われて直海はどう接していいか分からず、何も言わずにそのまま里親の家に向かって走り出してしまった。

まだ怖くて入れない。入って、また嫌われて、一人になりたくない——。そんな気持ちが、彼らとの距離を遠ざけた。

あつちに行きたい、でも行けない——。無我夢中で走ったせいか、どこかで道を間違えたらし

い。はっと立ち止まった時には前後に広がる一本道——。周りは木が生い茂るばかりで、どこにも家が見当たらない。

太陽は西に傾き、ほんのりと辺りをオレンジ色に染めていた。

——早く帰らなきゃ——。先へ行くか、それとも戻るか。少しの間、考えて直海が先に行こうとしたその時——。

「そっちは行き止まりだよ」

どこからか声がある。まだ若い男性のような声——。直海は辺りを見回すが、誰もいない。聞こえないはずの音が聞こえて直海は体の温度がすうつと下がるような寒気に一瞬、襲われた。来た道に戻ろうとすると、すぐ近くの茂みでガサガサツという音が聞こえてきた。

——何かいる。音を聞くと木の根元にそれはいる。怖くなって、後ろも振り返らずに直海は走り出した。どこをどう走ったのか分からない。しばらくするとまた誰かが直海の名前を呼んだ。

「直海ちゃん！」

里親のおばさんの声だった。

「よかったあ。なかなか帰って来ないから探しに行こうと思ってたんだよ」

毎日島を照らす太陽を浴びてチョコレートを塗ったように日焼けした、おばさんの人懐っこい

笑顔を見て、安心したのか全身の力がみるみる抜けていくように感じた――。

おばさんの家でおばさん一家と夕食を食べ終え、おばさんのお母さんと一緒に夜空を見ながら星を見ていたときの事であった。おばさんのお母さん――直海からするとお婆ちゃん、周りからはオバアと言われている。そのオバアの話聞くのが直海は好きだった。オバアはいつもとても面白い話を直海に聞かせてくれる。初対面の時も、まるで昔から一緒にいるように直海に接してくれていて、直海が島で一番安心して一緒にいる事ができる人――直海にとっては一番の友人でもあった。三日前は島の言い伝え、おとといは島の植物の話、昨日は海の生物の話。そして今日。

「今夜も綺麗に星が見えるねえ。都会じゃ星がこんなに見えないだろう。明日もきっと晴れるだろうねえ」

「うん」

「もう直海ちゃんが来て一週間だねえ」

「うん」

「この島には慣れてきたかい？」

「……うん」

最後はためらいがちに答えたが、オバアは直海がそう言ったのが嬉しかったのか笑顔で頷く。
「きつと夏休みが終わる頃には立派な島の子になつてるよお」

そう笑いかけるオバアの笑顔は直海への愛情に満ち溢れていた。

「今日は何のお話してくれるの？」

待ちきれなくて団扇うちわを仰ぎながら夜空を眺めているオバアに直海は話し掛けた。

「そうだねえ」

そう言うとオバアが少しの間、夜空を見ながら話題を考えているのか何も喋らなくなる。

「直海ちゃんは話猫（はなしねこ）の話を知っているかい？」

「ううん。何それ？」

「普通、猫はなんて鳴くと思うかい？」

「にゃーって鳴く」

「そう、普通の猫はにゃあって鳴くけれど、話猫っていうのは人の言葉を話すんだよ。見かけは普通の猫と変わらないけれど、時々、気まぐれに人の前に現れるんだよ」

「どんな猫？」

「さあねえ。話猫は一匹じゃないんだよ。どれぐらいいるかまではオバアも分からないけれどね

え」

「その猫達ってこの島にいるの？」

そう言つて直海は昼間の声の事を思い出した。

怖くて声の方向をよく見ないまま逃げ出してしまったが、まさかあの声が猫なんて事は無いだろう。

「まだ婆ちゃんが子供の頃にそんな話があつてねえ。話猫に会いたくなつちやつたんだよ。だから猫を見つけては片っ端から話しかけてみたよお」

そう言いながら夜空を見上げるオバアは少女のように輝いているように見えた。

「じゃあ話猫に会つたんだ？」

オバアが直海をじつと見る。

「いいや、探したけれども、どの猫もニャーとしか言わなくつてねえ」

笑顔でオバアは答えるが、声には寂しさが混じつていた。

「でもそれって昔の事じゃん。もしかしたら今はいるかもしれないよ」

慌てて直海がオバアを元気付けようとする。

オバアはそれを悟つてか、見るからに穏やかそうな皺だらけの顔をさらにくしゃくしゃにして

笑い、「そうかもしれないねえ」と答えた。

次の日、直海はおばさんのお手伝いで洗濯物を庭に干していた。

今日も澄んだ青空が広がり、太陽が海に行けとばかりにじりじりと島を照らす。早く洗濯物を干し終えて海に入るんだ、という思いがはち切れんばかりに直海の中に広がっていた。

「おばさん、洗濯物終わったよ」

「ありがとねえ、直海ちゃん。後はおばさんがやるから遊んでおいで」

「はあい」

そう言うが早い、直海は部屋に戻るとすぐに水着に着替えてゴーグルを持って外に出た。

島の外れのいつものビーチまでの道を夏の太陽に照らされながら歩く。辺りには珍しく人がいない。お昼御飯でも食べに行っているのだろうか。

でもその方が良い。亮太から逃げてしまったのだ。会ったら会ったでどう接して良いのか分からない。青空はその懐に自由に雲を泳がせている。真南から島を照らす真夏の太陽だけが直海を見ていた。

ずっと歩いていると、道の真ん中で猫が毛づくろいをしていてるところに出くわした。頭から背にかけて黒い毛で覆われているが、腹や手足は白い毛で覆われている。少し体が小さいように見えるから、まだ若いのだろう。猫は、直海がすぐそこまで近付いても毛づくろいに夢中になつて

いるのか逃げようともしない。

ふとオバアから昨日の夜に聞いた話猫の事を思い出した。

——まさか。

島に長い年月住んでいるオバアさえ会えなかったのだ。そんな事はない。

そう思つて猫をよけて海に向かおうとしたその時であつた。

「よっ」

「!？」

気のせいかと思つた。だが確かにそれは昨日、直海に行き止まりと教えたその声であつた。

声の方を見る。

「挨拶ぐらいしてくれよ」

喋つた。猫が男の声で喋つた。

「……何で喋れんの？」

逃げるにも足がすくんで動けない。泣きそうになりながらも目は猫に釘付けになっている。

猫がぱつちりとした瞳を直海に向けた。